第一章　序論

1-1　本研究の背景

環境問題の深刻化に伴って、環境と調和したライフスタイルへの転換が求められている。そのためには、個人が環境との関わりを認識し、自らの行動が環境に与えている影響を振り返ることが必要である。このような認識が環境負荷の少ない商品の選択やリサイクル活動などの環境配慮行動につながると考えられる。しかし、環境配慮行動をすることは、時間や手間、支出が余分にかかる場合があり、認識はしていても行動には移っていないという問題点もある。

環境問題における「環境」について、「ある主体をとりまく外囲であることは重要な点である。つまり、取り囲まれる主体があってはじめて存在するものである」[1] と述べられていることは、環境問題を根本から見直すことに重要な示唆を与えてくれるものだと考える。それは、上述したような認識と行動の不一致が、取り囲む主体のあいまいさに起因するということである。すなわち、環境問題を自分自身の問題として捉えきれていないという点である。

さらに、‘外囲’（環境）の範囲についての議論もある。「車からの空き缶のポイ捨ては、裏返せば自分の空間（車内）を美しくするための行動であり、この行動は身の回りの狭い空間の美化となる。個人の空間認識がせまく区切られていることにより問題が発生しているのである」[2] と述べられていることからも、‘自分にとっての空間の範囲をどこまで広げるか’といった点で環境問題を見直すことが必要である。

以上の議論は、人間と環境との関係性についての議論だと言える。そして、そのような人間と環境との関係性を見直すためにも、環境学習プログラムの必要性が挙げられる。藤村 [3] は著書の中で、環境学習プログラムのフローとして「“関心”→“知識”→“認識”→“行動”」といった段階的に目標を設定することの重要性を述べている。人間と環境との関係性（つながり）を認識するためにも、段階的にプログラムをデザインすることが求められている。そこで、本研究では、人間と環境とのつながりの認識の導入段階としてイメージ形成に着目した（イメージに関しての考察は **1-3　環境イメージの抽出によるアプローチ**で詳しく述べる）。

イメージ形成に有効な手段として、詩を読むことが挙げられる。詩を読むことで、読者は詠まれた内容を認識し、詩人（作者）のイメージを共有することができる。そして、詩的イメージと呼ばれるような効果によって、イメージを広げることが可能になるのである。以上のような詩の効果は、イメージ形成に有効な手段と成り得ると考える（**1-4　詩とイメージ**で詳しく述べる）。

さらに、人間と環境とのつながりを見直すための詩の素材としては、環境学習プログラムとして利用するためにも、わかりやすく、広範囲の年代にも適用できることが望まれる。そこで、本研究では、童謡詩人である金子みすゞに着目した。童謡というわかりやすい形

式で人間と環境との関わりを対等に表現しているため、上述したような条件にも適応できるものであると考えたからである。金子みすゞの詩について、矢崎節夫は「みすゞの童謡は、小さいもの、力の弱いもの、無名なもの、無用なもの、この地球に存在する、すべてのものに対する、祈りのうただったのです」[4] と述べていることからも説明できる。

具体的な作品としては、『大漁』を取り上げる。『大漁』は、金子みすゞの作品の中でも、小学校で授業の実践例があり、今後の有効活用にもつながると考えたからである（**1-2　研究対象について**で詳しく述べる）。

以上の議論から、本研究では、『大漁』のイメージ形成効果について調べる。

1-2　研究対象について

1-2-1　『大漁』

図 1-1 は『大漁』を現代仮名遣いで表記したものである。

大漁

朝焼け小焼けだ
大漁だ
大ばいわしの
大漁だ。

浜は祭りの
ようだけど
海の中では
何万の
いわしのとむらい
するだろう。

図 1-1　『大漁』[5]

1-2-2　『大漁』の概要

『大漁』が発表されたのは、1924 年（大正 13 年）、『童話』の 3 月号である。『赤い鳥』と共に大正時代の代表的児童文学雑誌であり、選者の西条八十に認められて掲載された。

以下に、西条八十が『少女倶楽部』、1935 年 8 月号で『大漁』に関して述べている部分を引用する。

「朝、浜辺へ行って見るとお祭りのようなさわぎで、そこら中は一面網であげられた鰯の山です。みんなは、『大漁だ、大漁だ。』と言って、跳ねて喜んでいます。その中にいて、お魚も、自分たちと同じように、神様から生命を授かってこの世の中に生きているものだということをよく知っている女の子は、ひとり、悲しく、青い海を見つめていました。『さぞ、海の中には、子供や、友達や、兄弟を亡くしたお魚たちが大騒ぎをやっていることだろう。』と考えながら。『金子みすゞ』は生きているものばかりでなく、草にも木にもいつも温かい愛情を持っていました」[6]。

とくに後半部分（海の中では以降）が特徴的であり、金子みすゞの個性が出ている部分であると言える。この部分の記述があることで、『大漁』は、視点を変えて物事を捉えることの大切さを教えてくれる詩であると言える。また、魚を捕る側、捕られる側の 2 つの立

場によって書かれているので、「人間は生かされているということ、だからこそ、感謝して食べることが大切である」[7] ことを教えてくれる。つまり、『大漁』には読者に“つながり”（人間と環境との関わり）を認識させる作用がある。さらに、前半部分の大漁に喜ぶ人々の記述から後半部分の記述への転換（視点の逆転）は、読者の不意をつく効果もある。

詩中の記述にある大ばいわしの収穫は 11 月から 3 月ぐらいであり、『大漁』はこの間の時期を詠ったものであると考えられる。

1-2-3　金子みすゞについて

図 1-2　金子みすゞ

1903 年（明治 36 年）、4 月 11 日、山口県大津郡仙崎通村（現在の山口県長門市仙崎）に生まれ、大正末期から昭和初期にかけて、全 512 編の童謡詩を残した童謡詩人。本名は金子テル。1923 年（大正 12 年）6 月頃からペンネーム“みすゞ”で雑誌に投稿し始める。雑誌に掲載された童謡が 90 編あり、『大漁』は大正 13 年 3 月号『童話』に掲載される。選者の西條八千は、「金子みすゞ氏も今月は例によつて光つた作品を多数寄せられた。中でも『大漁』以下の推薦作は私の愛誦措かないものである。『大漁』にはアッと云はせるやうなイマジネーションの飛躍がある」[8]と評した。また、1926 年には泉鏡花や島崎藤村などのそうそうたる詩人の作品と並んで、ただ 1 人女性会員として『日本童謡集』（童謡詩人会編）に掲載され、高い評価を受けた作品である。ここで、西條八千による金子みすゞの詩の選評を紹介する。『お魚』[9]（図 1-3 参照）では、「言葉や調子の扱ひ方にはずいぶん不満の点があるが、どこかふつくりした温かい情味が謡全体を包んでゐる。この感じはちやうどあの英国のクリスティナ・ロゼッティ女史のそれと同じだ。閨秀の童謡詩人が皆無の今日、この調子で努力して頂きたいとおもふ。」[10] と評している。

また、『砂の王国』[11]（図 1-4 参照）については、「氏には童謡作家の素質として最も貴いイマジネーションの飛躍がある。この点はほかの人々の一寸模し難いところである。現代の所謂童謡の大家と呼ばれてゐる人々の中にも、この貴重な素質に乏しいため、徒らに言葉を賑やかに飾り立て、辛うじて胡麻化しをつけてゐる者が多いのに、特にこの『砂の王国』などに顕れてゐる君のイマジネーションの如き、まことに珍とするに足りる。」[12] と評している。

お魚

海の魚はかわいそう。
お米は人につくられる、
牛は牧場で飼われてる、
鯉もお池で麩を貰ふ。

けれども海のお魚は
なんにも世話にならないし
いたずら一つしないのに
こうして私に食べられる。

図 1-3　『お魚』

以上のように、作品は高い評価を受けながらも、金子みすゞが 26 歳の若さでこの世を去ったため、作品は散逸し、幻の童謡詩人として語り継がれるばかりであった。童謡詩人・矢崎節夫氏によって掘り起こされ、『金子みすゞ全集』がJULA出版局より刊行されたのは、死後 54 年経過してからのことである。全集が刊行された直後には、長門市赤崎山に『露』の詩碑が建てられ、以後現在までに、長門市、下関市（金子みすゞにとって下関は詩の創作の地である。20 歳のころに上山文英堂に移り住み、店番を始め、その後雑誌に投稿を始めた）の金子みすゞ縁の地を中心に 18 の詩碑が建立されている。

砂の王国

私はいま
砂のお国の王様です。

お山と、谷と、野原と、川を
思うとおりに変えてゆきます。

お伽噺の王様だって
自分のお国のお山や川を
こんなに変えはしないでしょう。

私はいま、
ほんとにえらい王様です。

図 1-4　『砂の王国』

詩碑の他にも、文学碑（下関市）や胸像、さらにみすゞ公園、みすゞ館、金子みすゞ記念館等がある。また、仙崎駅前から町の中央を通って海岸へ出るまでの約 1 キロをみすゞ通りと名づけるなど、金子みすゞのまちづくりが進められている。みすゞ通り沿いの民家や商店などの軒先には、木札にそれぞれが金子みすゞの好きな詩を書いて飾るなど、住民が共同してまちづくりを進めている（図 1-5、図 1-6 参照）。

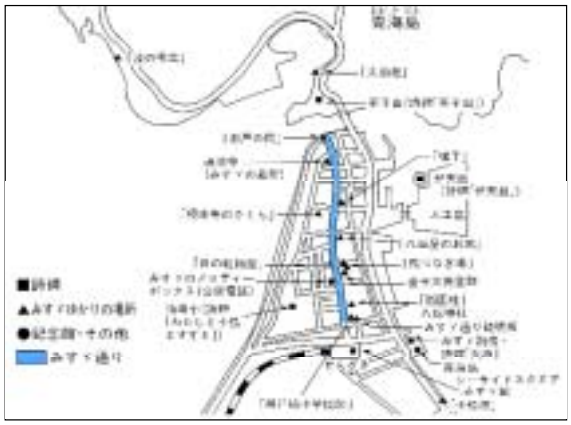

図 1-5　仙崎の地図とみすゞゆかりの地

図 1-6　みすゞ通りにある木札

金子みすゞの作品を用いた絵本、作品の選集、金子みすゞ自身に関する評論・エッセイなども数多く出版され、雑誌・新聞、テレビなどのメディアでも取り上げられた。テレビドラマや映画にもなり、2002 年は金子みすゞ生誕 100 周年ということもあって金子みすゞ

ブームが起きている。

学校教育の現場においても例外ではなく、金子みすゞの代表作である『わたしと小鳥と鈴と』[13]（図 1-7 参照）が 3 年生の国語の教科書に掲載されるなど、全国各地で金子みすゞの詩が授業で取り上げられ広がりを見せている。

わたしと小鳥とすずと

わたしが両手をひろげても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥はわたしのように、
地面（じべた）をはやくは走れない。

わたしが体をゆすっても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのように
たくさんのうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい。

図 1-7　『わたしと小鳥とすずと』

生誕の地である長門市においても授業での取り組みは盛んであり、金子みすゞの母校である仙崎小学校では「みすゞ教育」を全教育活動の基盤として取り組んでいる。「みすゞ教育」とは、「①ふるさと仙崎を学ぶ（歴史・文化・人物を知識として学ぶ）②ふるさと仙崎で学ぶ（仙崎～長門～日本～世界に広げていくことのできる材料で繋いでいく）③ふるさと仙崎に子どもの力を活かす（参加・参画による、ボランティアなどの体験活動の重視）④子どもの心の中にふるさと仙崎を育てる（仙崎に育って、仙崎、全国各地、世界で生きる時、ふっと、ふるさと仙崎の風景や友を思い出す心のより所として）」[14] という内容のものである。

また、本研究で取り上げた『大漁』を用いた授業も実践されている。金子みすゞの詩の実践集 [15] によれば、授業で取り上げたねらいは、生命の尊さを知り、自他の生命を尊重し、大切にしようとする心情を養うことである。展開方法としては、漁師の喜びといわしの悲しみを対比させながら進め、最後に、自分たちはどんなことができるかという内容で話し合っている。表 1-1 は金子みすゞの詩の実践集からの引用である。

表 1-1　『大漁』の授業での活用例

主な発問・予想される児童の反応	留意点
1　漁師が魚を捕っているところを見たことがあるか。 ・テレビで見た。　・見たことがない。 ・本で見た。　・地引網を見たことがある。 ○『大漁』の詩を読み話し合う。	・漁師の苦労が分かるように具体的な場面について話させる。
2　漁師が大変なことはどんなことか。 ・漁に出ること。（危険がある。）　・魚が捕れる量が一定でない。 ・仕事が天候に左右される。	・よくわからない児童がいるときは補足説明を軽く行う。
3　大漁のときの漁師の気持ちはどうか。 ・日頃の苦労があるからとてもうれしい。 ・この仕事をしてよかったと思う。 ・家族も喜ぶだろうと思う。	・浜の祭りの様子を創造させる。
4　いわしたちはどんなことを考えているか。 ・仲間が捕られて寂しい。　・みんなが捕られて悲しくなっている。 ・自分たちを捕らないでほしい。	
5　作者はどんな気持ちでこの詩を書いたか。 ・大漁はうれしいことだが、いわしの気持ちも知ってほしい。 ・いわしの悲しさを書きたかった。 ・人間の喜びといわしの悲しみを書きたかった。	・いわしの悲しさについて考えさせる。
6　みんなは、この詩を読んでどんなことを考えたか。 ・漁師さんは大変だ。　・人は喜ぶけれどいわしは悲しい。	
7　自分たちにできることは何か。 ・感謝の気持ちで魚を大事に食べる。	

1-3　環境イメージの抽出によるアプローチ

本研究では、人間と環境との関わりを考えるに当たって、イメージを抽出することによって『大漁』の効果を考える。具体的な調査方法については**第二章** で詳しく述べる。

1-3-1　本研究における環境イメージの定義とその特徴

イメージの研究については、心理学が最初であると考えられており、「人々の意識の観察、環境認知と行動の予測、等の目的の中で研究されてきた」[16)]。都市計画や地域計画の立場からも、都市や地域に関するイメージを抽出して、より良い環境の設計へ適用するために研究されてきた[17)]。その他、企業イメージ、商品イメージの向上のための研究[18)]等もある。

三省堂大辞林第二版によれば、イメージは、「①心の中に思い浮かべる姿や情景、心象、形象、イマージュ、②心の中に思い描くこと、③目の前にない対象を直観的・具体的に思い描いた像」[19)]となっている。イメージの定義については、「何がイメージなのかという見方は、理論的立場によっても異なってくる。またその研究者や理論家が、主としてどのような種類のイメージを、どのような側面から見ているかによって違ってくる。」[20)]と述べられているように、定義づけることは容易ではない。

そこで、本研究におけるイメージについて定義する。本研究では環境イメージを扱う。環境イメージについて、近藤は、「物的環境と人間との間に存在する媒介である」[21)]と述べている。また、リンチは、「観察者と環境との間に行われる相互作用の産物である。環境は区別と関係を提示し、観察者は－広い適応性をもちつつ、自分自身の目的に照らし合わせながら－見るものを選択し、組み立て、意味付けを行う」[22)]と述べている。本研究においては、“**人間が環境に対して心の中に抱いている姿や情景、心象、形象**”と定義する（図 1-8 参照）。

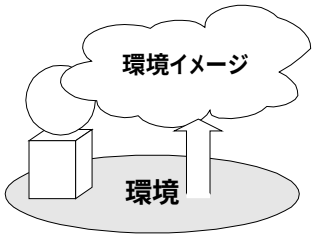

図 1-8　環境イメージの概念

環境イメージの特徴としては、「イメージは能動的につくりあげられたものである。知覚自体が、外界の模写ではなく、主体の構えによって構成されるが、それ以上にイメージは、構えや課題意識によってつくりあげられる。」[23)]と考えられている。例えば、「大漁」という言葉を聞いてイメージしたときに、ある人は「魚がたくさんとれてうれしい」と思い浮かべるかもしれないが、『大漁』を読んだ人では「確かに漁師にとってはうれしいことだが、魚はどんな気持ちだろう」と思い浮かべるかもしれない。したがって、イメージというのは、主体の意識や主体を取り囲んでいる環境によって形成される内容に違いが生じると言える。また、近藤は、「＜環境文脈的役割＞を付与した上での体験が環境イメージ形成に影響する」[24)]という結果をまち巡りイベントによる事例より見出した。以上のことから、イメージは、主体に対する仕掛け（本研究では、『大漁』を読むこと）や主体の意識、主体を取り囲む環境に影響を受けるのである。つまり、環境との相互作用によって、環境

イメージが形成されていくと考えられる。元のイメージを「固有イメージ」、形成後のイメージを「新規イメージ」と呼ぶ。新規イメージはさらに固有イメージとなって、変容していく。このように、環境イメージは更新していくという特徴を持つ。また、環境イメージには、複数の人間が共有するイメージが存在すると考えられている。このようなイメージを「共有イメージ」と呼ぶ。

1-3-2　大漁イメージの定義

本研究では、環境イメージをさらに具体化した「大漁イメージ」の抽出を試みる。「大漁イメージ」とは、“**人間が、大漁という事に関して心の中に抱く姿や情景、心象、形象**”とする（環境イメージの定義の「環境」の部分を「大漁」に置き換えた）。また、『大漁』の読後では、詩中の言葉のイメージや詩の内容に関するイメージ（『大漁』のイメージ）も加えられる（図 1-9 参照）。

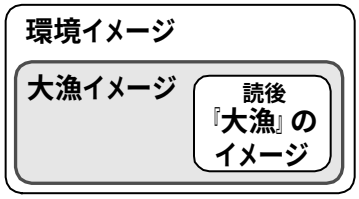

図 1-9　大漁イメージの範囲

1-3-3　環境イメージと環境意識に関する考察

本研究における環境イメージと環境意識の違いについて考察する。

意識とイメージという言葉に関して、三省堂大辞林第二版によれば、意識とは、「①（ア）物事に気付くこと。また、その心。感知。知覚。（イ）はっきりした自律的な心の働きがあること。自覚。覚醒。見当識。②状況・問題のありようなどを自らはっきり知っていること。」[25] とある。したがって、意識とはイメージした対象に対して、自覚していることだと考えることができる。「意識というのは、いま自分が持っているイメージが自分のものだと実感していることである」[26] と藤岡が述べていることからも説明できる。以上のことから、「意識にはいくつかのレベルがある。そして、イメージというのは、この意識の内容となっているものである。だから、意識とイメージは別のものである」[27] と考えられるのである。

つまり、環境意識とは、はっきりと環境問題の重要性について自覚していることであり、環境イメージとは、環境意識よりも認識の浅い状態だと考えることができる。

1-4　詩とイメージ

詩論を述べることは本研究とは直接関係がないが、本研究において詩を取り上げることの意義とイメージとの関係について述べておく。

詩は文学の一形態であるが、これらは言葉を素材とした芸術であり、作者の原体験や原風景を土台として創作されたものであると言える。『大漁』について言えば、金子みすゞが幼いころ見た、大漁でにぎわっている風景を、金子みすゞの表現方法、想像力などを導引

して実体化（表現）したものである。金子みすゞは表現方法として、七･五調のリズムや平易な言葉による記述を取り入れた。後半部の視点の逆転する部分も金子みすゞの想像力の賜物であると言える。つまり、『大漁』は金子みすゞの大漁の風景イメージ（『大漁』イメージ）である。

このようにして実体化した金子みすゞのイメージを読者は共有すると考える。本研究では、読者が金子みすゞの風景イメージ（『大漁』イメージ）を共有することで、イメージが形成されると考える。文学概論の中で、猪野が「文学の言葉というものがさきに述べたイメージと密接に結びつき、その形成に参加しているというところにあるだろう。その、想像力によってはじめて、文学の言葉は読者に強く明確なしかも全体的な心象を与える力をもち、たとえ日常の言葉と同じものでもそれはおのずから性質の違ったものになっているのだ」[28] と述べていることからも説明できる。

文学の中でも特に詩はイメージ形成効果が優れていると言える。それは、詩の言葉が単に対象を意味する記号ではなく、「言葉そのものが全体としていわば「もの」としての実態感を帯びている。言葉というものの持っている物理的な外観、その音とか長さとか視覚的なかたちなどを手がかりにした、あくまでも一個の像としてのその表象性や形象性がわれわれを感性的に動かす」[29] として使われていることから説明できる。これは「詩的イメージ」と呼ばれるものである。詩に対して、散文における言葉の使われ方はあくまでも対象を意味し、「何を書くかという事がいかに書くかに先行する。また言葉とその表示するもの、描く対象とのあいだにはある程度一対一の対応関係が成り立つ。」[30] ものとして使われている。以上が、詩と散文の言葉の使われ方の違いであり、イメージ形成効果にも影響を与えると考える。

『大漁』においては、平易な言葉で表現したことにイメージ形成効果を高める要因（詩的イメージ）があったと考えられる。それは、平易であるからこそ、読者の不意をつき、明確なイメージを与えるのである。仮に難しい言葉で同じ内容のことを表現していたとすれば『大漁』のイメージ形成効果は少なかったと考える。また、七･五調という定型においてリズム感のある描写を用いたことも『大漁』のイメージ形成効果を高める要因（詩的イメージ）であったと考える。さらに、前半部分の大漁に喜ぶ人々の記述から後半部分の記述への転換（視点の逆転）もイメージ形成効果を高める要因（詩的イメージ）であると考える。

つまり、散文ではなく、詩であるからこそ、読者にイメージを形成させるような体験と成り得るのである。そこに、本研究で詩を取り上げた意義があると考える。

1-5　イメージ形成のメカニズム

本研究ではイメージを①知覚、②認知、③記憶、④想起[31]の 4 つのプロセスに分解し、考察する。さらに、藤岡のイメージ・タンク[32]の概念を参考にし、イメージ形成のメカニズムについて考察する。

イメージ・タンクとは、図 1-10 のようにコンクリート状態、半コンクリート状態、無意識状態というように、イメージの状態を 3 段階に分けたタンク（入れ物）であると考えられている。コンクリート状態とは、すぐに想起することができるイメージのことであり、半コンクリート状態とは何らかの刺激によって想起することができる状態である。それに対して無意識状態というのは、心の奥底に眠ってしまって想起できなくなったイメージのことである。このイメージ・タンクの中では、絶えず新しいイメージが生起したり、変化したり、消失したりしている。つまり、イメージは日々更新していると言える（図 1-11 参照）。

次に、イメージの 4 つのプロセスについて述べる。知覚とは、「対象や環境の感覚的把握」[33]であり、認知とは、「知覚やその他の有機体的、環境的な要因に基づいて、環境について思考し、理解していく過程」[34]である。つまり、対象を知覚し、「自分にとって意味あるものとして位置付けること」[35]が①知覚、②認知のプロセスである。本研究では、知覚と認知のプロセスをまとめて認識と捉える。そして、認知したモノがイメージとして③記憶される。このようにして個人のイメージが形成される。さらにそのイメージを表現する際に、④想起するというプロセスを持つと考える。

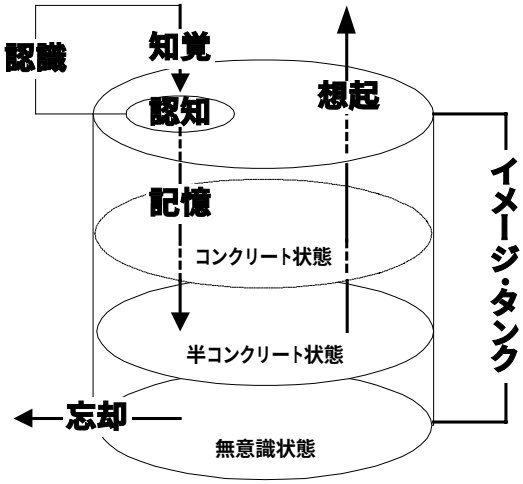

図 1-10　知覚から想起までのプロセス

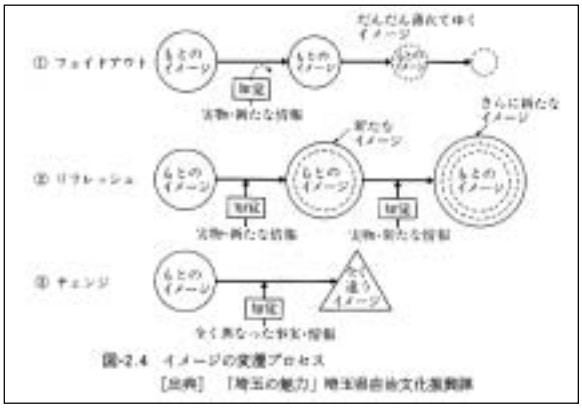

図 1-11　イメージの変遷プロセス

1-6　言語とイメージ

イメージの表現には、絵画、記号、写真、音楽、音声言語、文字言語など様々な表現方法がある。本研究では、文字言語によってイメージを読み取ることを試みる（以下、文字言語を単に言語と表記することとする）。イメージの性質上、ある個人のイメージを他者が客観的に全てを読み取ることは不可能である。つまり、イメージを研究するということは、対象者が表現したモノから読み取る他ない。被験者に絵を書いてもらって読み取る研究や写真投影法による研究などがあるが、これらは被験者のイメージを、絵や写真によって読み取ろうとしたものである。また、テクスト分析と呼ばれるようなテクスト（言語）からイメージを読み取った研究もある。

本研究では、イメージを言語によって読み取ることを試みるが、その理由としては、イメージの解釈の容易さと統計的な手法を適用することを前提としている。

また、その妥当性について言語規範の考え方を用いて説明する。言語規範とは、「言語表現のための社会的な約束事」[36] であり、文字言語規範とは「特定概念と特定字韻表象との結びつきに関する社会的な約束事である」[37] と定義することができる。例えば、「サカナ」（ここでサカナと表記したのは、もしかしたらそのサカナは死んでいるかもしれないし、とても小さいサカナかもしれないし、個人によって、どのようなサカナなのかは違っているので）を思い浮かべたとする。その思い浮かべてもらった「サカナ」を言語によって表現する際には、「魚」と書く。つまり、ある対象の概念を、言語と対応させることである。イメージが言語という表現方法によって概念化されるのである。その際に感性的な認識は除かれる（図 1-12 参照）。また、「たくさんのイメージを、ある一つのイメージで代表させたりもする。象徴と呼ばれるもの、また私達の言語などはそういうものである」[38] と述べられていることからもイメージと言語の関係について知ることができる。以上のことから、対象者が表現した言語を分析するということは、対象者の概念化されたイメージを分析するということである。つまり、言語からイメージを分析することが可能となるのである（図 1-12 参照）。

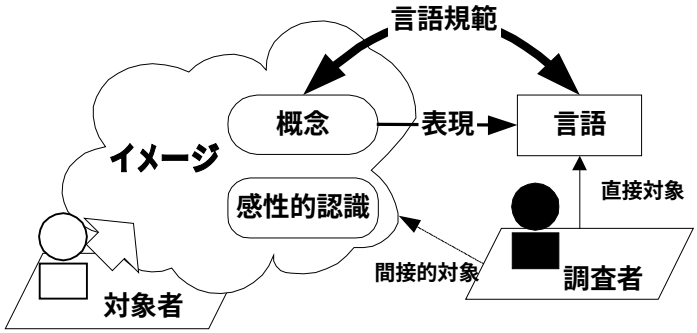

図 1-12　言語とイメージの関係と調査の対象

1-7　『大漁』を読むことによるイメージ形成のメカニズム（図 1-13 参照）

1-4　詩とイメージ、1-5　イメージ形成のメカニズム、1-6　言語とイメージを受けて、『大漁』を読むこととイメージ形成の関連について、イメージ形成のメカニズムに沿って説明する。

まず、『大漁』は知覚の対象として考えることができる。そして『大漁』に詠まれた内容（金子みすゞの大漁の風景イメージ）を認知するというプロセスを経る。知覚と認知を総称して本研究では認識と捉えているが、『大漁』を読むことで、読者は『大漁』に詠まれた内容（金子みすゞの大漁の風景イメージ）を共有し、認識することができる。ここでの認識の内容は読者それぞれであり、その内容が大漁イメージとして記憶される。例えば、「朝焼け小焼け」などの言葉自体がイメージとして記憶される場合や、「大漁の悲しみ」のようなイメージが記憶されることが考えられる。

本研究の調査では言語でイメージを抽出することは上述した通りであるが、これは想起の段階に当たる。想起された内容を調査によって把握し、分析する。例えば「大漁の悲しみ」のイメージにしても、読者それぞれ言葉にできないようなイメージもあるかもしれないが、そのようなイメージに関しては本研究では対象とせず、言語化されたイメージを分析対象とする。そして、言語によって想起された内容に、『大漁』のイメージ（金子みすゞの大漁の風景イメージ）を読み取ることができれば、『大漁』のイメージ形成効果が認められると考える。

『大漁』のイメージ（金子みすゞの大漁の風景イメージ）が読者（調査対象者）から想起されなかったような場合には、要因として以下の 2 点が挙げられる。一つは、イメージ・タンクにおける忘却のレベルにイメージが落ち込んでしまった場合である。一度はイメージとして記憶されたが、想起されずに忘れ去られたと考えることができる。つまり、読者にとっての印象が薄かった場合である。もう一つは『大漁』のイメージ（金子みすゞの大漁の風景イメージ）が認識できなかった場合である。これは、『大漁』を読んだが、読者に内容が伝わらなかったような場合のことである。

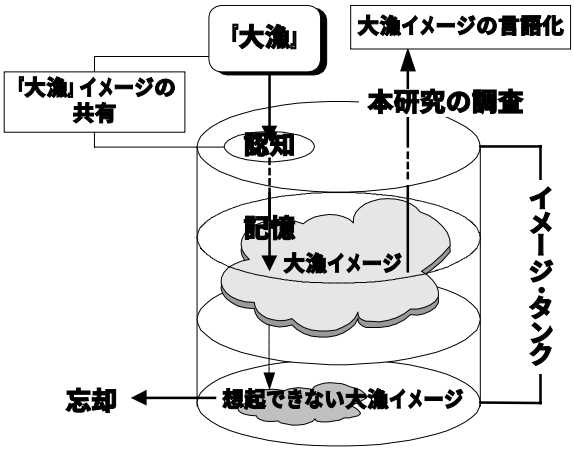

図 1-13　大漁イメージの言語化までのプロセス

1-8　本研究の目的と意義

人間と環境とのつながりの認識を深めるための一つの方法として『大漁』を取り上げることは上述した。また、『大漁』が人間と環境とのつながりの認識を深める効果があるのかどうかを把握するために、『大漁』の読後にイメージを言語によって抽出することについても上述した。さらに、『大漁』を読むこととイメージの形成のメカニズムについても考察を加えた。そこでは、イメージのメカニズムにおけるプロセスの中でも、言語として想起されたイメージに着目することについて述べた。そして、『大漁』を使った調査において、言語として想起されたイメージを把握し、金子みすゞの『大漁』のイメージ形成効果を実証する。さらに、調査結果を踏まえて、『大漁』を用いた環境学習プログラムを提案する。以上の 2 点を本研究の目的とする。

本研究の意義としては、環境学習プログラムとして『大漁』を活用することで、人間と環境とのつながりの認識が深まることである。また、文学作品を楽しむ（『大漁』）→人間と環境との関わりの認識という図式によって、環境学習への導入がしやすくなることが考えられる。さらに、『大漁』のイメージ（特に、視点の逆転）を環境学習の参加者が共有できること（『大漁』イメージの共有）は、環境学習プログラムのコンセプトとして活用でき、効果的な環境学習プログラムのデザインにつながると考える。

さらに、本研究では、個人のイメージ構造の抽出方法として「連想マップ」の手法を提案する（第二章）。また、分析方法としても、従来の、類似度を用いた構造化手法よりも厳密なイメージの構造化手法について提案する（第三章）。

1-9　本研究の構成

本研究は、人間と環境とのつながりの認識を深める素材として、金子みすゞの『大漁』を取り上げ、その効果を実証するものである。

本論文は、結論を含めて６つの章から構成されている。図 1-14 は本論文の全体構成と各章の相互関係を示したものである。各章における研究の目的及び方法は次の通りである。

第一章では本研究の目的・意義について述べた。また、本研究で対象とする『大漁』の詩と作者である金子みすゞ自身のことについてまとめた。さらに本研究におけるイメージの定義を述べ、言語や詩とイメージとの関連性、イメージのメカニズムについて考察した。

第二章では、本研究での連想マップ調査の概要についてまとめた。

第三章では、言語によって抽出したイメージの分析方法について述べた。本研究では、言葉のつながりの構造を、グラフ理論を用いて有向グラフとして表現するまでのプロセスと、有向グラフの解釈方法について述べた。

第四章では、『大漁』を読む前後のイメージ変化について比較・考察を行った。

第五章では、詩を読む前の大漁イメージについて地域間で比較・考察を行った。

第六章では、結論として『大漁』を環境学習プログラムに活用することについて考察した。

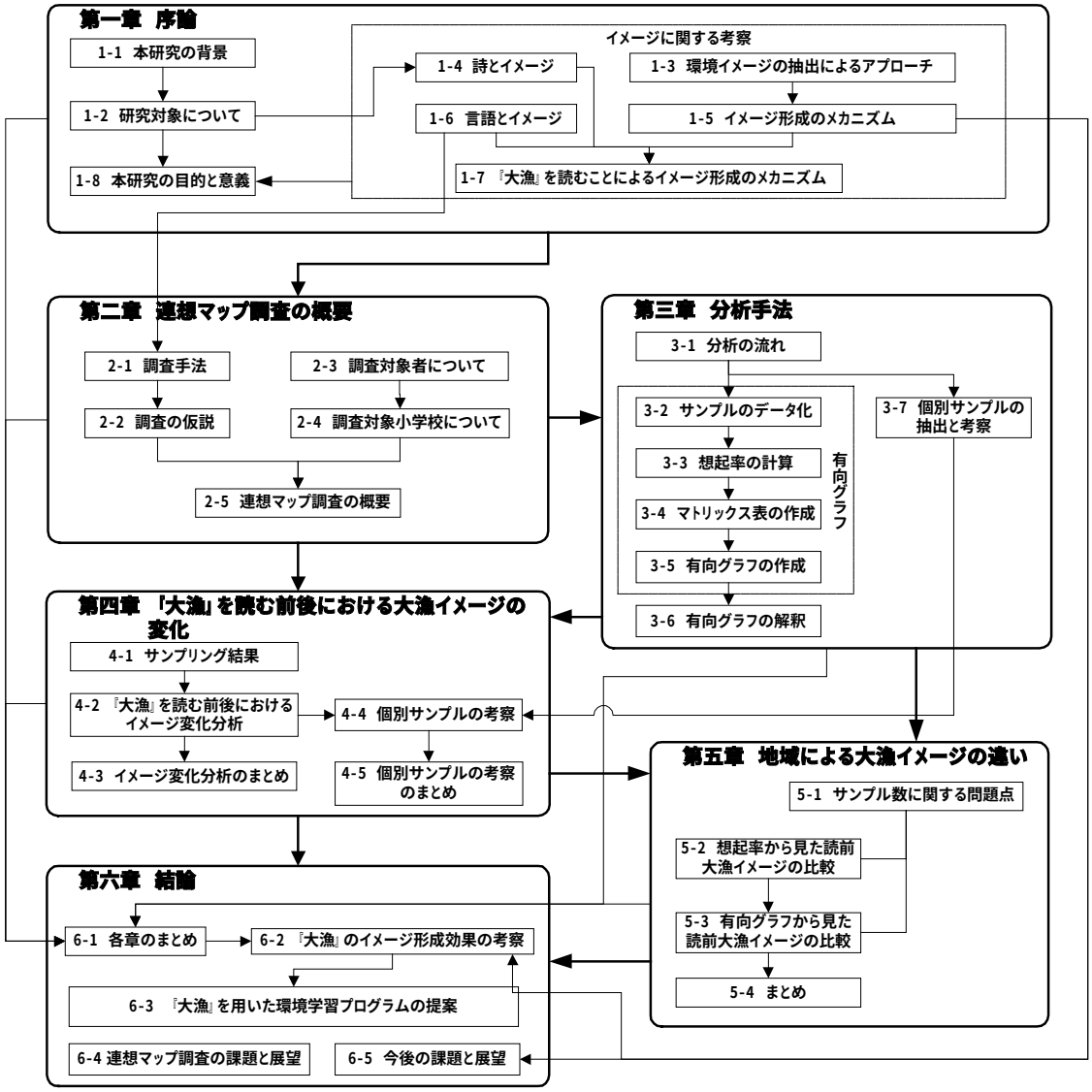

図 1-14　本研究の構成

脚注及び参考文献

---

1) 土木学会環境システム委員会：環境システム―その理念と基礎手法―，共立出版，p.1（1998）

2) 鈴木紀雄と環境教育を考える会：環境学と環境教育，かもがわ出版，p.156（2001）

3) 藤村コノヱ：環境学習実践マニュアル，国土社，pp.64-77（1995）
著書の中で、「環境学習プログラムとは、ある目的を達成するための一つの流れとまとまりを持つ学習プロセスの全体であり、個々の目標やねらいを持つ行動の組み合わせからなるものである」としている。そして、作成の手順としては、①目的を明確にする。②ねらい、対象者等を決める。③全体のストーリーを作る。④ストーリーに即して効果的なアクティビティを選択し、組み合わせていく　と述べている。

4) 金子みすゞ：前掲書，pp.159-160（1984）

5) 金子みすゞ：金子みすゞ童謡集‐わたしと小鳥と鈴と‐，p.16（1984）
6) 西条八十：「金子みすゞ」の詩，金子みすゞ没後７０年，河出書房新社，p.145（2000）
7) 八木下陽子・他：心を育てる新しい道徳授業を創る―金子みすゞの詩を生かす―，明治図書，p.63（2000）
8) 苅田郁子：金子みすゞ、母への憧憬, 金子みすゞ没後 70 年, 河出書房新社, p.223（2000）
9) 金子みすゞ：前掲書，p.14（1984）
10) 苅田郁子：前掲書，p.222（2000）
11) 金子みすゞ：前掲書，ｐ.130（1984）
12) 詩と詩論研究会：金子みすゞ詩と真実，勉誠出版，p.250（2000）
13) 金子みすゞ：前掲書，ｐ.106（1984）
14) 長門市立仙崎小学校：学校紹介＜http://www.ymg.urban.ne.jp/home/sensho/＞, 2002-12-15
15) 八木下陽子・他：前掲書，pp.61-66（2000）
16) 石見利勝・田中美子：地域イメージとまちづくり，技報堂出版，p.1（1992）
17) 土井勉：地域計画策定のための地域イメージの構造分析に関する研究，京都大学博士論文（1996）
18) 電通マーケティング戦略研究会：感性消費・理性消費、日本経済新聞社（1985）
19) 大辞林第二版，三省堂（1988）
20) 水島恵一：イメージ心理学，大日本図書，p.7（1988）
21) 近藤隆二郎：環境イメージの発達過程における役割行為の意義と効果に関する基礎的研究，大阪大学博士論文，p.19（1994）
22) ケヴィン・リンチ：都市のイメージ，岩波書店，p.8（1968）
23) 水島恵一：前掲書，p.3（1988）
24) 近藤隆二郎：前掲書，p.60（1994）
まち巡りイベントのデザインフローとして、①掘り起こし、②環境イメージの固定化、③＜役割＞の設定、④地域条件への埋め込み、⑤仕掛けの設定を提案している。⑤仕掛けの設定に関しては、「設定された＜役割＞および地域環境との相互作用を強調するものとして、参加者に対して意図される小道具やルールといったもの」と考えている。また、仕掛けのレベルを、イベントのコンセプト・基本要素（シナリオ、主体、演技、しつらい）、イベント体験後に分けて、まち巡りイベントの仕掛けを考えている。
25) 大辞林第二版，三省堂（1988）
26) 藤岡喜愛：イメージと人間，ＮＨＫブック，p.68（1974）
27) 藤岡喜愛：前掲書，p.68（1974）
28) 猪野謙二：文学概論，有信堂，p.11（1969）
29) 猪野謙二：前掲書，pp.11-12（1969）
30) 猪野謙二：前掲書，p.12（1969）
31) 志水英樹：街のイメージ構造，技報堂出版（1979）
知覚・認知・想起・記憶の 4 つの概念を含んだプロセスをイメージと呼び、想起作用を手がかりにイメージの想起プロセス、イメージ量を計測し、中心市街地の物的環境との関連を分析した
32) 藤岡喜愛：イメージ‐その全体像を考える‐，NHK ブックス（1983）
33) G.T.ムーア・他：環境デザイン学入門－その導入過程と展望－, 鹿島出版会, p.86（1997）
34) G.T.ムーア・他：前掲書，p.87（1997）
35) G.T.ムーア・他：前掲書，p.138（1997）
36) 津田道夫：イメージと意思，社会評論社，p.130-131（1989）
37) 津田道夫：前掲書，p.134（1989）
38) 藤岡喜愛：前掲書，p.67（1974）